

「バルセロナ民族学博物館」の 「セラ・コレクション」とその背景

Etonològic de Museu Barcelona and Sella Collection

朝岡康二

- ① はじめに
- ② バルセロナの公立美術館・博物館
- ③ バルセロナ民族学博物館とそのコレクション
- ④ セラはどのようにして日本資料を収集したか
- ⑤ エウダルド・セラ・グエルという人物
- ⑥ おわりに

[論文要旨]

本稿はスペイン・バルセロナにおける公的な博物館群の社会的な位置付けやその表象機能を紹介するとともに、これらの博物館群のひとつを構成するバルセロナ民族学博物館の特徴を示し、同時に、そこに収蔵されている日本関係コレクションの持つ意味の検討を行ったものである。

同博物館の日本関係コレクションは、収集を行ったエウダルド・セラ・グエルの名を借りて、ここでは仮に「セラ・コレクション」と称することにする。

同コレクションは決して古いものではなく、1960年代のいわゆる民芸ブームの中で収集された民芸品（あるいは観光記念品）であり、美術的な価値という点から評価するならば、貴重であるとは、必ずしも言い難いものである。しかし、見方を変えるならば、戦後の観光文化（なかでも地方都市の文化表象としての）を具体的に示すものとして興味深い資料であるし、また、当時のヨーロッパの一般的な観点からの「日本文化」であると言う点から言えば、また別の意味を導き出すことができる。近年のヨーロッパにおける大衆的な日本ブームと繋がるものだからである。

さらに、このコレクションを集めた意図・過程・集めた人物などを検証していくと、その成立の背後に戦後のバルセロナのブルジュワと芸術家の集団があることがわかり、その持つ意味を知ることができるし、あるいは、明治・大正・昭和に跨るヨーロッパと日本を繋ぐ複雑な人的関係の一端も明らかにすることができる。そのキーパーソンがエウダルド・セラ・グエルなのである。

本稿においてこれらの諸点が十分に解明されたというわけではない。いわば手掛かりを得たに過ぎないのであるが、それでも、次の点を知ることができた。

それは、バルセロナにおけるセラを中心とする広範な人的関係に加えて、セラと日本を結ぶ（したがって、「セラ・コレクション」の背景となる）人的関係に、住友財閥の二代目総理事であった伊庭貞剛の一族がおり、「セラ・コレクション」はこの一族の広範な海外交渉史の一面を示すものである、ということである。

①……………はじめに

本稿は「バルセロナ民族学博物館 (Museu Etnològic de Barcelona・バルセロナ市立)」に収蔵されている日本関連資料「セラ・コレクション (Serra Collection)」について、その概要を紹介するとともに、同コレクションが成立した背景に言及して、ヨーロッパにおける近代日本の資料収集の一例として若干の検討をおこなうものである。

筆者は1998年(平成10年)11~12月の約2ヶ月、バルセロナ民族学博物館の招聘によって同地に滞在して、地域の文化表象としての各種の博物館・美術館の多元的な機能の実態を見聞するとともに、「セラ・コレクション」についても基礎的な調査をおこなった。

その際に知りえた同地域における公立博物館・美術館の諸形態については、稿を改めて紹介するつもりであるから、ここでは概観に止める。また、現在、スペインにおいても行政改革にともなう博物館・美術館の再構築が進行しつつあり、調査当時と現在では、若干異なる点が生じていることもお断りしておく。

この地域の博物館・美術館を概観すると、いくつかの点に特徴を見ることができる。そのひとつは、各施設のあつかうテーマが設置母体(国立・州立・市立・港湾関連協会など)との関連によって、役割分担が行われているかに見えることである。そして、それらは共通の歴史認識(価値認識?)に基づく相互補完的な関係にあるというよりも、多元的な認識をそのまま個別的(ばらばらに)に表象していることである。いわば国家・地域・都市・港湾などが個別・固有の価値観に基づいて提示されており、時には対立的でもあるという、この地域の文化的状況を背景にしている。

たとえば、それはバルセロナの知識人が自らの文化を述べる時に、初めに語るのはバルセロナの都市文化であるが、さらに地域を拡大して述べようとする時には、カタロニア地方ということになる。そして、一層地域を拡大する時に、「スペイン」という国家的な枠組みを用いるよりも、「半島(The Peninsula)」という表現を好む(ように見える)、といったことである。

この場合の「半島」とは、ヨーロッパ大陸の「半島」部分を意味しており、いにしへのこの地域とフランク王国との関わりに繋がる地域認識なのである。すなわち、ヨーロッパ文明に半島的な特質を加えたものがイベリアであって、その先進地域がカタロニアであると見なすのであろう。

それでは、カタロニア地域の人々がすべてバルセロナを直ちに文化的な中心と認識しているかとなると、からずしもそうとは言えないようである。バルセロナの特質のひとつに地中海の代表的な港湾都市であるという点があり、それはピレネーの南麓地域としてのカタロニアと文化的な意味合いが異なる。その上で、近代都市バルセロナはヨーロッパ・ブルジュア文化の中心地のひとつだったのである。

このような多様な表象の存在自体が、カタロニアの近現代の史的経緯を率直に反映していると思われる。

②……………バルセロナの公立美術館・博物館

バルセロナ市内の公立博物館・美術館について、以下に簡単なスケッチを示しておきたい。

もっとも規模の大きいカタロニア地方の博物館（美術館）は、バルセロナの後背地、モンジュック公園（Parc de Montjuïc）の高台に威容を誇る「国立カタロニア美術博物館（Museu Nacional d'Art de Catalunya-MNAC）」である。この美術博物館は、1929年のバルセロナ万国博覧会の象徴であったPalau Nacionalを改装して、1990年にいくつの既存の美術館・博物館（中心は旧カタロニア美術博物館（Museu d'Art de Catalunya））を統合して作ったものである。

その展示はカタロニア地域（特にピレネーの南麓地域）に数多く残されているロマネスク文化の成果を中心にしており、それに付け加えてロマネスク文化を受け継ぐゴシック文化・バロック文化に及んでいる。いわば、ヨーロッパ中世以来の様式史的な展開をピレネー以南において示そうとする歴史展示なのである。

このことはスペイン王国絶頂期の美術文化を集成したマドリッド（カスティーニョ地域）の「プラド美術博物館（Museo del Prado）」の様相と対比して見ることができる。言い換えれば「国立カタロニア美術博物館」はスペイン王国的なものを排除してヨーロッパ的な枠組みを用いたものである。1990年（バルセロナ・オリンピックの開催時）に設置されたこの国立美術博物館にとって、このようなヨーロッパ的な様式史を取り入れることは好都合であって、EUの統合が現実化している現代の政治・社会状況にもよく見合ったものである。

そして、このヨーロッパ的な様式史の文脈は、そのまま近代ブルジュア文化に受け継がれていると考えられているから、それを表象するものとして、カタロニアの近代美術をあつかうプランチ「近代美術博物館（Museu d'Art Modern-MNAC）」が併設されている。

それでは、このような様式史的な展示をおこなう「国立カタロニア美術博物館」以外にこの地域の歴史文化を表象する博物館は存在しないのか、と言うとそうではない。

これとは別に「カタロニア地域史」を展示の中心にしている「カタロニア歴史博物館（Museu d'Histria de Catalunya・カタロニア州立）」がバルセロナ（Barceloneta）の一隅に存在する。

その内容は古代・中世カタロニアから近現代に及び、政治と経済、都市と農村の生活文化、スペイン内乱、フランコ時代とそれ以後を含む、いわば地域的な通史的展示であると言ってよく、前述の「国立カタロニア美術博物館」の様式史的な展示とはまったく異なる「事件史」や「生活史」が中心になっている。日本で言えば、各地の歴史民俗博物館に類似すると言ってよいものである（政治・経済・戦争が含まれる点で日本の場合とは異なる）。

「カタロニア歴史博物館」では常設展示に併せて企画展示も行なっており、筆者が観覧したものに「カタロニアとアラベスク」とでも言うものがあった。

この地域のロマネスク様式にはアラベスクの痕跡を示すものがあるが、その遺物を集中的に展示することによって、この地域に残るムスリム文化の影響を表すとともに、併せてムスリム文化とともに渡来した有用植物・食物などを用いて今日の地域文化との関わりを示し、さらには地中海対岸のムスリムの生活習俗などを紹介するものであった。

その意図は多分、最も早く再キリスト教化した地域であるカタロニア地域にヨーロッパの様式史的理解を超える別の光を当てることにあったであろう。

近代スペインはモロッコの一部を支配してきた歴史を持ち、現在も対岸地域に小規模の植民地を保持している。そして、今日は北アフリカからの移住者の急増が厳しい社会的・政治的問題になりつつあり、それと同時に北アフリカとの産業的な紐帯が著しく強くなりつつもある（加工業の生産拠点が移動している）。そういう現実を背景にして組み立てられた企画展示と理解できるのである。

こうした企画展示を含めて「カタロニア歴史博物館」の展示はカタラン（カタロニア語）を共有する人々（国境を超えて南フランスにもいる）」のエスニック・アイデンティティを基礎にして、それがどのようにスペイン国家に内包されたか、あるいはどのように自律的に近代化したか、さらには地中海を超えて北アフリカとどのように繋がっているか、などを表現しているかに見える。その意味で「カタロニア歴史博物館」は、地域を基礎にした表象施設なのである。

バルセロナの港の正面には、もうひとつ大規模な博物館がある。

それは「バルセロナ海洋博物館 (Museu Marítim de Barcelona・公共団体立 (Consorci de les Drassanes de Barcelona))」である。この博物館は、コロンブスの新大陸発見後500年を記念して近年リニューアルしたもので、港湾に隣接する元造船所の大きな空間を利用したアミューズメント・パークの要素を持つ体験型博物館になっている。

大空間の中央にはローマ時代のガレー船の実物大の復元模型が収まっており、この模型を中心に、この時代以後の地中海文化の多様な展開を示す総合的な展示がおこなわれており、その上でさらにバルセロナの港が重要な役割を果たした近代のメキシコ・南アメリカ移民の様相を大規模な模型によって紹介するという構成になっている。

このように「バルセロナ海洋博物館」は港湾バルセロナの表象であるが、同時に近代史に深く関わるメキシコ・南アメリカ移民の出発地であることを強調している点も興味深かった。これらの移民も、淵源をたどればコロンブスに結びつき、その発展的な結果として捉えることができるであろう。日本人の見方では、メキシコ・南アメリカなどスペイン語圏の存在を植民地主義の負のイメージとして捉えがちであるが、むしろここでは、移民を地域間交流の基礎と見なしているように思われるのである。

この他に、歴史博物館として「バルセロナ市歴史博物館 (Museu d'Histria de la Ciutat (市立))」があり、都市としてのバルセロナの歴史を示すものである（ここにバルセロナ市とカタロニア州の持つ意味の相違が反映している）。

この博物館は大聖堂などが集まる市街の中心地域に位置しており、その地下にはバルセロナの原型になったローマ時代の都市 (Colonia Iulia Augusta Faventia Pterna Barcino) の遺跡がそっくりそのまま埋まっている。

そして、この遺跡の上にローマ時代の生活層が数層重なり、その上にロマネスク・バロック時代の教会遺構がさらに幾重にも重なっており、その地表部分には現代の大聖堂が聳えている。地表から下降して行くにしたがって過去に遡り、もっとも深いところにローマ遺跡が残されている。逆に言えば、大聖堂の尖塔を登りつめると、そこから未来に繋がっていることを示すと言えるのかもしれない。すなわちこの仕掛けは、時間の推移を層序によって示す考古学的な展示そのものである。

そして、それは市域の発展と繁栄をこの一地点において集中的に示すものでもある。文明装置としての都市の表象なのである。

以上のように、バルセロナの博物館を形式的に分類すると、それらは一元的な歴史観・文化観に基づき、それをいくつかの側面から補完的に表現しているのではなく、個別的な目的や意図に基づいて、相互に矛盾に含みながら存在するものであるといえる。そのことが結果的にこの地域の多様性を表現していると理解することができるのである。

③……………バルセロナ民族学博物館とそのコレクション

それでは、こうした美術館・博物館の配置のなかで「バルセロナ民族学博物館」はどのように位置付けられるであろうか。以下ではこの点に触れることにしたい。

ヨーロッパの港湾都市には様々の規模の民族学博物館が設置されており、このことはよく知られている。これらは一般にキリスト教文化圏以外の地域で収集した珍品・奇品を集めて閲覧に供するといったもので、必ずしも学問的に洗練されたものばかりではなく、プリミティブな異文化への好奇心に基づいているものが少なくない。そのために異文化への旺盛な好奇心と共に、コレクターの個人的な思い入れを示すものが多く、そこから収集品の持つ個別の面白さだけでなく、集め方の偏りから見えるコレクターの姿勢といった点も、なかなか興味深いものである。そのような観点から「バルセロナ民族学博物館」とそのコレクションに関心を持つとともに、公立博物館としてなぜ「民族資料」を収集したのか、その動機にも興味を抱いたのである。

「バルセロナに民族学博物館」が最初にどのように設置されたかはあいまいである（準備段階が長期間に亘ったようであるが、その詳細はよく分からない）。いずれにしても、今日の姿になって公開されたのは古いことではなく、同博物館の主要なコレクションは、この時点で収集されているようである。

すなわち「バルセロナ民族学博物館」のコレクションが充実したのは、アウグスト・パニェリャ (August Panyella) が館長をしていた1950年代末からの十数年間であるという（この間、建造物としての博物館が存在していたのかどうかは不明である。たぶん存在しなかった）。その後（1973年）にモンジュック公園の一角に現在の建物が完成して公開展示されて現在の姿になった、ということのようである。はじめに既存の資料に追加するための資料収集を行い、コレクションを充実した後には博物館を立ち上げたのではないかと思われる。

1950年代からのコレクションの充実には、前述のアウグスト・パニェリャとフォルチェ財団 (Fundación Folch) を作ったアルベルト・フォルチェ・ルシニョール (Albert Folch Rusiñol)、それにエウドラド・セラ・グエル (Eudald Serra Güell) が関わっており、当時、このグループが世界各地に精力的な資料収集旅行をおこなったのである。

1950年代末まで孤立主義的であったフランコ体制は、国連のスペイン排斥の解除（1950年）を経て1955年に国連に再加盟する。それと同時に国内的には、徐々に自由主義経済に移行して工業化を推進していく。こうして外国為替・外国投資の自由化政策が実施されるようになるが、このような政治的・経済的な変化が彼らの活発な資料収集旅行を可能にしたのだと考えられる。

グループの一員であったフォルチェは、母親のリタ・ルシニョール (Rita Rusinol) が有名な画家、サンチャゴ・ルシニョール (Santiago Rusinol) の姪で、妻のマルガリータ・コラチャン (Margarita Colachan) は共和派亡命者の娘で南アメリカ育ち、いずれもバルセロナのブルジュワジー出身であった (当然、フォルチェもブルジュワジー出身であった)。

そして、フォルチェは兵役時代のカナリア諸島派遣以来、アフリカン・ネイティブの造形に強い関心を持ち、その後もフランスのトゥルーズ (Toulouse) やマルセイユ (Marseilles) の骨董屋へ出掛けてはアフリカのコレクションを増やしていたという (父親譲りのコレクターであったともいう)。こうした点から、民族学博物館館長であったパニェリャと親交があったと考えられるが、この当時、フォルチェは塗料会社 (Folch S.A. 一説にクレヨン製造で成功したとも言う) を率いる有力な財界人であって、すでに成功した実業家として知られていたようである。

このグループのもう一人の重要人物はセラであるが、彼は日本からアメリカ西海岸を經由してビルバオ (Bilbao) に帰国して、15年ぶりにバルセロナに戻って来たばかりであった (1948年帰国)。

この時にセラは「東洋からはるばる帰って来たバルセロナ人」として新聞種になるほど話題になったものであるという (日本人とフランス人との混血の妻を伴っていたことも話題になったのである)。この点は後述する)。

そして、この帰国をきっかけにして、パニェリャと知り合うことになったという。パニェリャは、日本帰りのセラはきっとアジア文化に詳しいに違いないと考えて、資料収集の相談をしたらしいのである。

これ以後、三人を中心にする資料収集グループができて、各地に盛んに収集旅行をおこなうようになった。彼らの資料収集旅行の概要は、次のようなものである。ジョアン・テッシュアドール (Joan Teixdor) によるセラの紹介 (『Erudald Serra』 Fundación Folch) によれば、セラは帰国して4年後の1952年に初めてパニェリャと共にモロッコに出掛けているが、それ以後、54年・56年にもモロッコ旅行を繰り返しており、57年には民族学博物館の資金 (あるいはバルセロナ市の?) によって日本に派遣されている。この時の日本での資料収集は約850点に及び、それらをバルセロナに持ち帰っている (以後も民族学博物館はセラの日本の資料収集に資金を提供している)。

57年の日本旅行の場合には、ヴェトナム・カンボジャ・インド・ネパールに立ち寄って帰国しているが、その2年後の59年には、再び少人数のツアー・グループを作って来日、東南アジアを巡っている。この時は資料収集が目的というよりも一般的な観光旅行ではなかったと思われる。

そして、この時のグループ・ツアーには前述のフォルチェも加わっており、たぶんはこの旅行がきっかけとなって、これ以後、セラとフォルチェを中心とするグループの資料収集旅行が、延々と繰り返されることになったのである。

一方、セラとパニェリャは60年にも民族学博物館の資金によってネパールを訪れており、さらにセラは61年にも日本に来て資料収集を行っており、この時には約630点の資料をバルセロナに持ち帰っている。この時期からセラを中心にするフォルチェらとの大規模な収集旅行と、民族学博物館の資金によるパニェリャらとの収集活動のふたつが行われるようになったのである。

これ以後、フォルチェとセラの収集旅行の訪問地域はアジアに限られなくなり、またたくまに南アメリカ・オーストラリアなどを含む世界的な規模に拡大していった。

62年には先のグループは世界一周旅行を行っており、セラは64年に民族学博物館・フォルチェの双方から資金をえて、ペルー・セイロン・日本・韓国・オーストラリア・ニューギニアに資料収集に出掛けており、この時に日本で集めた資料の約800点も今日民族学博物館に収められている。

さらにセラとフォルチらは、65年にパナマ・コスタリカ・ニカラグア・グアテマラ、66年にはオーストラリア・ニューギニア・ソロモン諸島・ニューヘブリデス、67年にはアフガニスタン・インド、68年には再びオーストラリア・ニューギニア・タイ・コロンビア・日本、69年にはボルネオ、70年にはビルマ・タイ・マレーシア・台湾・香港・シンガポール・ニューギニア、71年には象牙海岸・アフガニスタン・インド・シッキム・日本・ニューギニア、73年には象牙海岸・マリ・パキスタン・韓国・日本・タイ・インドネシア、74年はモロッコ・インドネシア、75年にはラダー・タイ・韓国・日本・フィリピン、76年はタイ・中国・日本、77年にはタイ・日本、78年にはパキスタン・フロレス諸島、と憑かれたように旅行を繰り返しているのである。

こうして収集した資料の多くはフォルチェ財団 (Fundación Folch) に収められて、現在はフォルチ家の屋敷内の建坪2,000㎡はあろうかと思われる建物に収蔵展示されており、すでに民族学博物館において「Art of Equatorial Guinea The Fang Tribes」「Etnografía de Filipinas」「Arte Txtil en Indonesia」などの企画展示を通して一般に公開されている。

このように、パニェリャ・フォルチェ・セラらの収集資料の大半はフォルチェのコレクションとなっており、民族学博物館に収蔵したものは資金を分担した初期のものに限られるようである。日本に関して言えば、この時期に併せて9回来日しているが、収集活動をおこなったのは3回だけのようなのである。この3回は民族学博物館の資金で来日しており、これが「セラ・コレクション」となった。

いずれにしても、この時期に、突如として大規模な資料収集と憑かれたような旅行が始まって、それがその後20年近くも継続したことは、不思議といえばまことに不思議なことである。

その理由をはっきり聞く機会はいえなかったが、ラテン的な情熱か、成功した実業家の気前のよい道楽か、あるいはその両方であったのか、当時の日本では考えがたい豪勢な事業であったことには間違いない。

そして、これらの旅行の企画・運営はセラを中心に行なわれていたと考えられ (いつも妻のエドモンド・イバ・ボージョ (Edmonde Iba Bougeót) も同行していた)、行き先・収集品目などにセラの個性が強く反映しているように見える。

集められたコレクションを眺めると、その中身は実に多岐に及んでおり、あらかじめ何らかの基準を設けて、体系的に収集していったものとはとても思われない。そして、その多様さ (あるいは行き当たりばったり) にも、セラの個性や考え方が関わっているように見える。ニューギニアの強大な木像や丸木舟、中国の仏像、インド・ネパールのヒンドゥー彫刻、アフガニスタンの金細工など、地域的にも品目的にもまことに雑多な集合で、見方によれば「観光土産の驚くべき規模の大集成」である、と言えるが、その一方で、セラという個性による選択の結果であった、とも言える。

後にフォルチェ財団は、これらの旅行地域を紹介した豪華本『フォルチェ財団の開かれた世界 (Miradas el Mund Abierto del la Fundacion Folch)』を出版している。その内容はセラからの聞き取りを中心にリライトしてまとめたものであるらしく、セラの個性がよく表現されている。

そして、『フォルチェ財団の開かれた世界』における地域文化の紹介は、アカデミックな調査結果であると言うよりも、むしろロマンティックな異国情緒をたっぷり含んだもので、当然ながら、かなりの偏見・誤解が散見されるものである。

例えば、日本についてのキーワードは竹の家・紙の壁・禅などであり、アイヌがあたかも原日本人であるかのように描かれていたりする。そして、仏教・神道・禅・武士などの用語が適当に散りばめられており、それらの結合に歴史的・美的な脈絡をあたえた上で、写真を用いて示すと言うものである。どの地域に対しても内容はこの程度に過ぎないが、対象地域の方は実に広大で、アメリカ（中央アメリカ・南アメリカ）・アフガニスタン・パキスタン、インド・チベット・ネパール・中国・韓国・日本・タイ・ビルマ・カンボジャ・フィリピン・インドネシア・ニューギニア・オーストラリア・アフリカを大分類項目としてまとめている。そこからは異郷の多様さに対する並々ならぬ好奇心を感じざるをえないのである。

ところで、セラは民族学を専門とする研究者ではなく、戦前に日本で暮したのも、日本文化を研究するためではなかった。実はバルセロナ美術学校出身の彫刻家だったのである。

セラは学校時代以来、アンゲル・フェラント（Angel Fellant）に師事しており、戦後、バルセロナに戻ってからはジョアン・プラッツ（Joan Prats）、ジョアン・ミロ（Joan Miró）、パピツ・レオレン・アルティガス（Papitu Lloren Artigas）などと親交を結んで、戦後のバルセロナ美術界を代表する芸術家のサークル「Club 49」（1949年に結成？）に属していた。

前述のジョアン・テッシュアドールは、彫刻家であるセラの収集活動を「学者あるいは大学にいる書斎派の民族研究者の活動ではなく（中略）、彫刻家の意思と美学的な経験が情熱的な調査に駆り立てた」ものであると評価している。すなわち、その収集は美術的な観点に基づいて行われていたと言うのである。

そして、この表現は、次のことを暗示していると思われる。

すなわち、今ではあまり通用しなくなった概念であるが、かつて近代美術運動に大きな影響を与えた「原始芸術（未開美術）」（Primitive Art）に対する情熱である。

異文化の造形を「原始芸術（未開美術）」と位置付けて、その美術的な価値を高く評価することによって、当時のヨーロッパ美術を相対化しようとした思潮は、いわゆる立体派やシュールレアリズム運動といった芸術動向に連動しているが、このことをバルセロナとの関わりでいえば、ピカソやミロの活躍（伝説的なピカソの「アビニヨンの娘たち」など）を通して、身近な先進的思潮として受容された時代があったに違いないのである。

そして、この「原始芸術（未開美術）の発見」という異文化に対する関心の持ちようは、内乱後のフランコ政権下を潜り抜けて、戦後もバルセロナのブルジュア層のなかに生き続いていたと考えられる。フォルチェが、徴兵・派遣されたアフリカで（カナリア諸島に配属されて、そこからたびたびモロッコへ派遣されていたという。それは内乱期ないしはフランコ時代初期のことであろう）、いわゆる原始彫刻を初めて手に入れて持ち帰ったことが、フォルチェ・コレクションの始まりであるとされるが、そこにこの時代の風潮がよく表れていると思われる。それが脱フランコ時代に活発な収集旅行となって復活したというわけである。当時、すでにピカソやミロはバルセロナの誇る世界的な芸術家であって、彼らを生み出した美的源泉を「原始芸術（未開美術）」に見ていたのである。

そして、パニェリャはこれと同じような観点から、民族学博物館を充実させる必要があると考えたのではなかろうか。これに対してバルセロナ市も容易に資金を提供しているから、当時の社会的な気分がどのようなものであったかが、そこからうかがわれるのである。バルセロナにとって国際社会への復帰とは、ヨーロッパ的な秩序への回帰だけではなく、ピカソやミロを継承することでもあって、それが民族資料への美術的関心を掻き立てたのだと考えられる。

こうした社会的な背景にセラの独特な性向が加わり、そのこともコレクションの内容に反映していると考えられる。

その性向のひとつに、人種の形質的な相違に彫刻家らしい関心を持っていたことがある。すなわち、彫刻家として把握した人体頭部の形質的な特徴を文化的な特徴に結びつけて、民族文化を理解・解釈していたらしい。セラにとって、形質的な多様性はそのまま文化的な多様性に重なっていたのである。

そして、このセラの形質的側面に関心を持つ性向は、若い時期から持っていたものである。神戸に在住していた時代に（後述）、朝鮮人女性の写実的な肖像を制作しており、戦後、帰国前に北海道に出掛けてアイヌ男性の肖像も制作している（しかしなぜか、日本人の形質には無関心であったようで、「典型的日本人」の肖像はまったくは制作されていないし、日本人を写実的にとらえようとしたものもほとんどない）。

この点について、テッシュアドールは「彼はアメリカインディアン・ベルベル人・黒人・黄色人がその原始的（未開の（primitive））生活によって獲得した（人体の）形質的な線と形に強く衝撃を受けた」として、彼のこのような造形的関心が民族資料収集の基礎になっていることを示している。そして、セラのこの性向は、後の収集旅行時代にも受け継がれており、訪れた地域の典型的な形質を示すと思われる人々（natives）をモデルに選んで、その特徴を強調した頭部見本をたくさん制作している。

この頭部見本も、一括しても民族学博物館に収蔵されているが、その写実力はなかなかしっかりしたものである。

その上でもう一点、セラの日本の資料に対する視点には、他の地域に対するものと少し異なる点があることを見過ごせない。それは前述の「典型的日本人」にほとんど関心をいだかなかった（あるいは日本人を典型化できなかつた）ことであるが、それが15年間におよぶ生活経験の故であるか、あるいは日本に原始的（未開の）活力を見出せなかつたからであるかは明らかではない。

そこで、以下では1957年・61年・64年の三回の収集旅行で集めた日本の資料品目がいかなるものであったかを示して、あわせてその特徴について検討を加えておきたい。

④……………セラはどのようにして日本資料を収集したか

すでに述べたように、1948年にバルセロナに帰ってから以後、セラはたびたび来日する機会を得ている。そのうちの1957年・61年・64年は、民族学博物館の費用によって日本資料を集める目的で来日したものである（南回りの往復にはアジア各地に立ち寄ってはいるが）。

この三回の収集活動に関して、民族学博物館にはセラが記入した購入記録簿が保存されており、

そのコピーが筆者の手許にある。その記載は、始めは品物ごとに丁寧に記述しているが（品名・地名などはローマ字で表記されて簡単な略図が付いている。それにスペイン語の解説があり、購入価格も記入されている）、後半はブランクが多く日付も欠けるようになってくる。

また、以後に民族学博物館で資料整理をおこなったために色々な人手が入っており、かえって混乱している部分もある。

そこで、この購入記録を整理しながら、なにを、どこで、どのように収集したかを見ていくことにしたい。

（1）1957年の収集

1957年の記録の始めの部分には、品目ごとに品名・使用地・購入日付・購入場所・単品の価格・その他が記載されている。品名・地名などはローマ字で書かれているが、なかには聞き違いと思われるものも含まれる。

さて、57年の場合には6月に来日して関西（直接に大阪に着いたか？）に滞在しており、購入記録は6月20日から始まっている。内容の一部を整理すると以下ようになる。

◎57年6月20日

阪急（「たくみ」阪急デパートのなかにあった民芸品店（著者注））・大阪

- 団扇・三角笊・果物籠・炭籠・布袋・手拭・卓布（鳥取県）
- 酒徳利・茶碗・皿・湯呑み・癩瓶・取り皿・片口（牛戸窯（鳥取県河原町牛戸の柳宗悦・河合寛次郎などによって紹介された窯（著者注））・鳥取県）
- 手箒（青森県）・手箒（栃木県）・小袋籠（青森県）
- 土瓶・湯呑み（益子・栃木県）
- 砂糖壺（淡路・兵庫県）
- 小鉢（島岡（達三カ）益子・栃木県）
- 癩瓶・刷毛目皿・片口小鉢。（小石原窯（高取焼？（著者注））・福岡県）
- 飯茶碗（袖師窯・松江・島根県）
- 豆鉢・片口（本郷窯・福島県）
- 角皿・小皿（湯町窯（出雲焼）・島根県）
- 蛇徳利（丹波窯・兵庫県）
- 畳（テーブルクロス？）（倉敷・岡山県）
- 雪帽子・はばき（秋田県）

◎57年6月20日か？

セイコウ堂・東山・京都

- 暖簾（祇園・京都）
- 抹茶茶碗・野点茶碗（須田ショウジョウ・浅見ヨシ三・宮川香山・勝見コウサン・京都）
- 壺（瀬戸・愛知県）

- 酒徳利（九州）

- ◎ 7年6月20日か？
山本・清水・京都
- 壺（丹波・兵庫県）
- お盆（朽木・滋賀県）
- 姫達磨（伊予・香川県）
- 虎（伏見・京都）
- 煙草盆（京都）
- 井戸車（織部・愛知県）
- お盆（京都）
- 灯火（蠟燭）（瀬戸・愛知県）
- 虎・弁慶・相撲・富士娘（亀井堂・東京）
- 馬飾り（宇土・熊本県）
- 清正（馬乗り（著者注））（弓町（唐津（著者注））・佐賀）
- 馬乗り猿（長崎県）
- あけび鳩車（野沢・長野県）

以下、阪急・三越といったデパートとその他の民芸品店・楽器屋から、板相撲・花魁・アチャさん・カチカチ猿・天神饅頭喰いなどの「郷土人形」を約20点、達磨・八幡馬などの「郷土玩具」を約40点、さらに飯室・草履・背負い袋・塵取り・鉈・柄杓などの「生活用具」、砥部・袖師・立杭・丸柱・沖縄などの焼物、三味線・琴・琵琶・太鼓・笛・縦琴・銅鑼 鈴・拍子木などの楽器、各種の梳櫛、傘・絵馬・算盤・団扇などを購入している。

その後には有馬（温泉）に行ったようで、そこでは箒・竹細工をたくさん仕入れている。

その購入方法はなかなか徹底したもので、例として履物・下駄について見ると、烏表草履・後丸下駄・パナマ（表）利休下駄・斜歯表皮草履・竹塗下駄・漆塗下駄・竹張下駄・小ぼっくり（漆塗り）・柂下駄・畳下駄・高下駄・黒塗高下駄・竹駒下駄・神代杉下駄を一度に買入れている。

こうして、この年には総点数約850点を集めてバルセロナに送ったのである。

（2）1961年の収集

セラは、1961年にも再び資料収集のために来日するが、今回の収集方法は前回と少し異なった点がある。京都や大阪の民芸品店からまとめて買うのではなく、日本各地を旅行しながら集める手法が加わったからである。

この年の記録は、関西ではなく東京から始まっており、初めは東京の「クラフトセンタージャパン」でまとめて購入している（その品目は、前回「たくみ」などで購入したものと類似の、いわゆる民芸品である）。

しかし、61年5月14日には愛知県の瀬戸に出掛けて、ここで大量の瀬戸物を購入する。最初は赤

津に行き、ここで水野半次郎窯から約20点、陶次郎窯・品野窯から数点購入して、次いで多治見に移動している。多治見では、牧野万次郎窯から数点買い入れ、さらに荒川豊蔵の水月窯を訪問して、ここでも16点ほど買入れている。

その後は再び瀬戸へ戻って加藤作助から1点、生駒利一（骨董屋？）から15点ほど購入して、信楽に移動する。信楽では高橋楽斎・上田直方などの茶陶作家から10点ほど買入れてから京都に向っている。この旅行は瀬戸・多治見・信楽の窯場を訪問して買い付けをする「焼物の里ツアー」だったのである。

5月20日と21日には、京都の陶芸作家・石田キク太郎・八木一夫・鈴木治・熊倉順吉などを訪れて、石田から2点、八木から6点、鈴木から2点、熊倉から1点買っているが、さらに骨董屋を訪れて古伊万里・唐津・瀬戸・油皿などの下手物も購入している。

この時の作家訪問には八木・鈴木・熊倉などの走泥社グループの陶芸作家（artista）が加わっており、購入品のなかにはジャクリーン・バーンシュタイン（Jacqueline Bernstein）というニューヨーク・ブルックリン住の陶芸作家も含まれる。ここから、57年の時とは品目・集め方に違いがあることが分かるが、その後は（以後は日付が欠けている）、兵庫県尼崎市武庫乃庄に出掛けて（収集が目的ではないと思われるが、理由はわからない）ここでも骨董屋から雑多なものを買っている。

5月27日には高山に出掛ける。高山でも民芸品店から行灯皿（瀬戸）・鉢（飛騨）・皿（伊万里）・箸立て・自在鉤・酒徳利などを50点ほど買入れている。今度の旅行は先の「焼物の里ツアー」に対して「民芸の里を訪ねて紀行」といった趣である。

次いで、5月30日には丹波・笹山に行き窯元を訪問したようであるが、ここでも骨董屋から徳利・皿（瀬戸・立杭）などを23点購入しており、次いで備前に行って備前焼その他を買付けている。その購入品のなかに藤原啓・藤原雄・金重陶陽など、当時よく知られていた作家が含まれている。

以後、5月31日は倉敷、6月1日には多度津・坂出・高松とめぐって、団扇・郷土玩具・砥部焼などを集め、2日には松山で竹細工・砥部焼きなどを購入、次いで高取に行って2日から4日まで滞在、窯元を訪ね歩いたようである。同4日には有田に移動して6日には鹿児島に行く。ここで薩摩焼や沈寿官の作品を買入れて、7日には宮崎、9日には延岡・日田とめぐっている。なんとも精力的というべきか、気ぜわしいというべきか、まことに慌しい民芸品店・骨董屋めぐりの旅行である。こうして10日に福岡に戻って、12日には松江・米子・八頭郡河原・倉吉などに移動して、この時も多量の買い付けを行っている。

この場合の購入方法は、必ずしもその土地の産品を買入れたわけではなく、丹波で有田焼を買う、鹿児島で壺屋焼を買うといった例も多く、基本的には「たくみ」や「クラフトセンター」での買い方と異ならないといえる。

その後、17日には益子に出掛けて窯場巡りをおこなったようである。

ここでは浜田庄治・島岡達三・佐久間籐太郎・加守田章二の作品を買入れている。8日には京都に戻って近藤悠三の作品を購入している。その後に東京から出国したようである。

この年に収集した総点数は約630点（瀬戸で拾った10点ほどの陶片を含んでいる）である。今回は主として西日本をめぐる約1ヵ月の収集旅行に益子が加わるものであった。

(3) 1964年の収集

1964年7月には香港に立ち寄って、九龍から収集を開始している。

日本に着くと、これまでと同様の品物を鎌倉・名古屋・瀬戸・東京のデパート・民芸品店などで買い集めて、その後に東北地方に出掛けている（東北旅行には日付が記入されていない）。

まず、会津若松・本郷（宗像窯）・米沢を経て、山形で和紙・こけし・独楽・鉄器などを、仙台では、こけし・達磨・玩具・椀・曲物・紙子・和紙・筆筒など購入する。盛岡では塗物・花巻人形（24点）・鉄器（約20点）と縄文石器（鏃など）を50点ほど手に入れて、八戸では風絵・焼物・絵馬、青森では菱刺しの野良着なども買っている。さらに弘前・横手・酒田・鶴岡とめぐって、その後佐渡に渡っている。佐渡では石仏などを購入している。

こうして佐渡から長野に戻り、松本から高山に入る。二度目の訪問先である高山は特に気に入ったのか、ここで雑多な民芸品を約160点ほど買入れてから京都に戻ったようで、以後は京都・神戸・大阪の民芸品店・骨董屋からの購入品が記録されている。

これで今回の収集は終わりかと言うとそうではなく、さらに神戸・高松・備前・倉敷・岡山に出掛けてようやく終了する。集めた資料の総点数は約800点、したがって三回の収集旅行によって約2400点のコレクションができたのである。

さて、以上の三回の収集旅行を比較すると、微妙な相違を含んでいる。

一回目は京都・大阪の民芸品店などから買い集めているが、二回目は瀬戸・多治見、西日本（中国地方・四国・九州）、あるいは益子へと、短い日程でたくさんの地方都市・窯元を駆けめぐる精神的な旅行を行っている。そして、いわゆる民芸作家（走泥社も含む）から直接に購入することと、雑多なものを出掛けた先々の地方都市で民芸品店・骨董屋からまとめて買うことを交互に行っている。

三回目は、初めから東北日本・中部日本に焦点を合わせて旅行を計画したようである。

行き先は柳宗悦などの民芸運動に関わりの深いところが選択されており、その当時、「民芸の里を訪ねて」といった観光の対象となっていた地方都市を数珠繋ぎに訪れており、行く先々で民芸品店・骨董屋を回って買い入れをおこなっている。この時には会津本郷以外に民窯に行っていないようで、ここが二回目と異なる点である。

したがって、集められた資料は、当時のいわゆる民芸品、言葉を変えればノスタルジックな観光土産であった。そして、京都に滞在しながら、奈良には一步も足を踏み入れず、1日旅行でわざわざ益子まで出掛けるといったセラの行動が、その民芸偏重ぶりを象徴的に示している。セラは日本の古典美術にはまったく関心を示すことなく、「民芸の里」を特急列車で巡礼していたのである。

このことは、いわゆる民芸品が外国人の眼からするとエキゾチックなものであり（それはセラの観点というよりもバルセロナ側の理解といったらよいか）、また比較的安価で集めやすかったからと考えられるが、もうひとつには、日本側として民芸愛好家が付き添っていたからであると考えられる。セラの日本語の能力はよくわからないが、前出の「フォルチェ財団の開かれた世界」の内容に見られる日本についての知識から推測すると、「民芸の里」巡礼の計画を彼が一人で立てたとはいえなくても思えないからである。

また、慌しい鉄道の乗り継ぎを鮮やかにこなしていることからしても、日本人が付き添っていたことは間違いなく、この同行者の考えや知識がセラの旅行・収集方法に反映していると考えられるのである。そこでさらに推測を加えると、三回の旅行の同行者は、収集の微妙な相違からして別人ではなかったかと思われる。

これを別の観点から見ると、一般に日本人観光客は、これらの地域に郷愁（古里のたたずまい？）を求めて出掛けて、その記念に民芸品を購入して帰るのであるが、セラの場合には、訪問した先の町や村々の名所旧跡・風景・施設・暮らしぶりなどには、あまり関心を持ってはいなかったように見える。そのことは、セラの常識的はずれの慌しい旅行ぶりと、ひたすら民芸品店・骨董屋で資料を買い集める姿からもうかがえるし、文化に関心を持つ芸術家というよりも、買い付け業務で出張してきた商社マンのように見えることにも表われている。

以上のことをさらに別の観点から見ると、セラの考える民族学博物館のコレクションに適う「原始美術」的なものは日本では入手しがたく、その代替として民芸品をとらえたのではないかと考えられるが、柳宗悦とその信奉者たちの考え（民芸の美学）やそれに基づく造形が「原始美術」に繋がる民衆的なものとして受け入れやすかったのであろうか。

もう一点、このことに関連して、日本で暮らしていた戦前のセラの活動からは、民芸との繋がりをほとんど見出すことができないことも注目される。確かに神戸に住んでいた1943年頃に陶芸を学んで、茶碗などを作った経験があり、このことが窯場めぐりの背景になっていると考えられるが、それ以上のことはまったく見出せないのである。

そして、依頼主であったパニェリャが持っていた日本イメージも、今ではまったく分からない。しかし、少なくとも十九世紀末にパリで風靡したジャポニズムでないことは確かで、だからこそ日本の紹介をセラに託したのであろうが、そこで発見された新たな日本は、いわば民芸ブームの名残であった。ただし、前述の「Club 49」のメンバーの一人・アルティガスは50年代のパリで北欧工芸運動の影響を受けており、その関りのなかで日本の陶芸と出会っている（後述）。

いずれにしても、ここでの日本イメージは、禅・茶・箸・着物・畳・盆栽・空手などに象徴される大衆的なジャポニズムに繋がっており、今日も繰り返し登場するステレオタイプであり、それは同時に、日本人の自己表象としても利用されてきたものである。

このようにして、場違いとも思われるバルセロナ民族学博物館に、大量の観光土産的な民芸品に幾分かの陶芸作家の作品を加えて、さらには下手物の骨董品も含むコレクションが収められたのである。

⑤……………エウダルド・セラ・グエルという人物

「エウダルド・セラの生活遍歴 (Restros de vida EUDALD SELLA)」と銘打ったセラの回顧的な展覧会が、バルセロナ文化協会 (Institut de Cultura de Balcelona) によって開催されたのは、1998年10月20日～翌99年2月4日のことであった。この時期に筆者はバルセロナに滞在しており、この展覧会を見る機会があってセラの活動歴の概要を知ったのであるが、その後数回セラ本人にもお会いしてお話を聞くことができた。

それでは、セラと日本の関係はどのようなものであったか、ということになるが、それには戦前の経歴を見ておく必要がある。次のようなものである。

1911年にバルセルナ生まれ。

1929年・バルセロナ美術学校 (la Escueja de Artes y Oficios y de Bellas Artes de Barcelona) に入学。

1935年・バルセロナ大学の学生グループと共に中国・上海に旅行し、その後グループと分かれて来日、神戸に住み着く。

1936年・スペイン内乱が発生、帰国できなくなる（領事館との関係でフランコ派に組み入れられる）。

1937年・二科展に入選。38年、青樹社（東京）・三角堂（大阪）で展覧会。

1938年・エドモンド・イバ・ボジョ (Edmonde Iba Bougeot) と結婚。

1943年・阪急百貨店で展覧会。

1935年（昭和10年）に来日して以後、セラは神戸に住むことになる。当時のセラの彫刻やスケッチに朝鮮人が多く登場するのは、神戸の朝鮮人居住地域に住んでいたからである。

来日4年後に、カトリック教会で知り合ったエドモンド・イバ・ボジョ（日本名はスギ子であったという）と結婚する。この女性は伊庭簡一とフランス人女性・ガブリエル・ボジョ (Gabriel Bougeot) の間に生まれた混血で、なれそめはフランス語で会話ができたからであろうと推測される。エドモンド・イバ・ボジョはあまり日本語が上手ではなかったと言うからである。セラはその後スペイン領事館に努めるかたわら、創作活動に従事して、上記のように二科展に出品したりしている。

それではセラの妻となったエドモンド・イバ・ボジョの父親、伊庭簡一とはどのような人物であったのだろうか。この当時、フランス人の妻を持つ人はそう多くはなかったはずであるから、その点からも興味深い、なかなか不思議な背景を持つ人物なのである。

はじめに、伊庭慎吉の名前が『明治の洋画・鹿子木孟郎と太平洋画会』（児島薫・「日本の美術」352）に、わずかではあるが登場するので、そこから追いかけてみることにしよう。

洋画家志望の鹿子木孟郎は、西洋画を本格的に勉強するためにアメリカに渡るが、1901年にロンドンを經由してパリに入り、1年ほどの予定でアカデミー・コラロッシ、アカデミー・ジュリアンなどで西洋画の基礎を学んだ（近年、アカデミー・ジュリアンに通った日本人画学生の研究が進んでいる）。パリに入った鹿子木は、浅井忠の薦めによって住友家に援助を要請して、これによって滞在期間を2年延長することができたという。推薦者の浅井は住友家と関係が深かったようで、帰国後にやはり住友家の援助による「関西美術院」の設立などを行っている。

こうして鹿子木も住友家と関係を深めることになり、住友家のためにアカデミー・ジュリアンの師・ローレンスの大作「ルーテルと彼の徒弟」を購入して日本に持ち帰ったりしているという。

そして、鹿子木孟郎は、1906年（明治39年）に再び渡仏することになるが、その時に斎藤与里とともに伊庭慎吉（鹿子木の画塾に出入りしていたと考えられる）をフランスに伴っており、こうし

て伊庭慎吉も、アカデミー・ジュリアンに通うことになったのである。

『明治の洋画・鹿子木孟郎と太平洋画会』に記載されている児島薫の調査によれば、伊庭慎吉は、アカデミー・ジュリアンの「支払い記録」に1906年4月9日から1907年4月8日までの1年間分を支払った者として記録されていると言う。最初は洋画を勉強する目的にパリに行ったようであるが、途中で彫刻にかわったようであるが、いずれにしても、これ以後近年まで、伊庭慎吉の名前は日本の近代美術史にはほとんど登場することがなかった。

鹿子木は1907年に帰国したが、慎吉は1909年（明治42年）までパリで暮らしていたという。それを日本の親族が引き戻したのである。帰国後の慎吉がどのような暮らしをしていたかと言うと、近江八幡に住んで滋賀県立商業学校の絵画教師になった（非常勤だったようである）。そして、妻・春野が京都下鴨神社神官・祝家の長女であったことが縁で沙沙貴（佐々木）神社の神主も勤めるようになったという（そうではなくて、近江佐々木家とつながる伊庭家の子孫として佐々木神社の神主になったと考えるべきかもしれない）。

1913（大正2）年には安土村（現安土町）に住宅を建てて移住する。この建物がウィリアム・メルレル・ヴォーリーズ（William Merrell Vories・近江兄弟社の創立者。建築家でもあった）の設計したアトリエ付き木造住宅で現在も残っており、安土町指定文化財として一般に公開されている。なかなか立派な建物である。ここで慎吉は昭和6年～10年までと昭和16年～20年まで村長も務めており、昭和26年まで住んでいた。

そして、このアトリエは小杉放庵などが使用したという。

それでは、この伊庭慎吉の渡仏の背景に、なぜ鹿子木孟郎と住友家の関係が反映しているかというと、それは、伊庭慎吉は、住友家の大番頭・伊庭貞剛（号して「幽翁」）の四男だったからである。

本題からすこし外れるが、伊庭貞剛について若干の記述をしておきたい。

「住友修史室」によって復刻（1981年（昭和56年））された『幽翁』（1933年（昭和8年）・文政社）の末尾年譜による伊庭貞剛の簡単な履歴は、次のとおりである。

1847年（弘化4年）・近江・西宿村（現近江八幡市西宿町）の代官家に生れる。

1876年（明治11年）・官途を退き、叔父・広瀬幸平（住友家初代総理事）の縁で住友家に入る（本店支配人）。

1880年（明治15年）・大阪紡績株式会社（東洋紡）を起こす。

1882年（明治17年）・大阪商船株式会社を起こす。

1800年（明治28年）・別子鉱業所支配人。

1900年（明治33年）・住友家二代目総理事。

1904年（明治37年）・住友家を引退。

1926年（大正15年）・逝去。享年80歳。

住友財閥の歴史において、広瀬幸平と伊庭貞剛は欠くことが出来ない重要人物であり、近代の住友財閥をこの二人が作り上げたことは広く知られる。

そして、浅井忠・鹿子木孟郎などが住友家から援助を受けていたのは、伊庭貞剛が住友家二代目

総理事の時代のことで、そうしたなかで住友と浅井忠との関係が生じている。したがって、その関係は直接にというよりも、伊庭を介しているのではないかと考えられる。具体的な資料が残っているかどうかかわからないが、明治時代後期のパリ帰りの洋画家たちと貞剛の間にはなんらかの繋がりがあり、そのなかで四男・慎吉も洋画に憧れるようになったと推測されるのである。こうして慎吉は、鹿子木孟郎に付いて渡仏したが、伊庭貞剛の子息であったからこそ、一年分の前払いも気前よく済ませることができたし、同じパリの画学生生活といっても貧乏画学生のそれとはまったく違っていたと思われる。そして、帰国後の生活にもまったく困ることはなかった。佐々木神社の神主はかつて祖父も勤めているから、いわば伊庭家の役割として受け継いだのであろう。また、安土の新居は貞剛の資金で作られたと言われており、安土駅の新設も貞剛の尽力によってできたのだという。さらに慎吉自身も、摠見寺の改築などのパトロンであったようで、こうした事から長年にわたって村長を勤めることになったのだと考えられる。

伊庭貞剛は、慎吉がフランスに出掛ける直前の1904年（明治37年）に住友家を引退して近江・石山の別業に退隠したが、実際には以後も経済界に大きな影響を持ちつづけた。（1924年（大正13年）まで住友本家顧問・住友銀行監査役であった）。

伝聞によると、貞剛は慎吉をフランスから早く帰国させたいと考えて、その当時、ボストンに遊学していた慎吉の次兄・簡一の帰国に際して、慎吉のところまで一緒に帰るように迎えにやったのだという。1909年（明治42年）のことであった。

ところが、向かえに来た簡一の方が、慎吉の下宿先の娘・ガブリエル・ボジョ（Gabriel Bougeot）と親しくなって、それが結婚話にまで発展することになった。

貞剛は当初、この結婚に強く反対したというが、結局は認めることになって、簡一はガブリエルを伴って帰国している。後に貞剛はガブリエルに「巴里子」という日本名を付けていたという。

その後、簡一は父の作ったOSK（大阪商船）に勤めてパリ・ロンドン・ニューヨークなどに赴任したが、その間、ガブリエルは神戸に住んでいたという。簡一は大正初めにOSKを退職、以後は戦後まで伊庭家の資産管理をするといった生活であったらしい。二人の間に生れた子供は3名あって、男子一人は住友商事社員としてシンガポールに派遣されて戦死、長女がエドモンド、次女のシモンはスイス人の商社マンと結婚して現在ニースで暮らしているという。

貞剛は、80歳になった1926年（大正15年）、5月27日に子女たちへ石山に参集するように呼びかけた。前述の『幽翁』によれば、その日には「長男・貞吉をはじめ、子女達はすっかり石山に参集して、午後三時前後には一同紋服で翁の居間に」集まった。そこで、貞剛は財産目録を取り出して遺産分配を行い、その上で、石山の別荘「活機園」を子孫が共同で管理するものと決定した。こうして「活機園」を運営する直系子孫による「聴松会」が作られたのである。

セラとエドモンド・イバ・ボジョが結婚した時に、父・簡一は58歳（1880年（明治13年）生）であった。伊庭家の人々は、過去に慎吉が洋画を学びにフランスに行ったこともあり、周辺に多くの芸術家を見てもいたから、エドモンドと外国人芸術家・セラとの結婚には強く反対していたという。しかし、これも結局は認めざるをえなかったようで、1938年（昭和13年）に結婚、1941年（昭和16年）には長女・イザベラ（Isabel）が誕生している。そして、セラは神戸のスペイン領事館に正式職員として勤務することになるが、これには伊庭家の力が関わっていたようである。

なお、この年に「活機園」は「聴松会」から住友本社に寄贈されて、以後は住友グループによって管理・運営されてきた。そして、昨年に国指定の重要文化財になり、現在は年に数回一般にも公開されている。

以上のようなエドモンドとセラの関係を見ていくと、セラが容易に関西の美術界に受け入れられたのは、当然のことであったと言える。

こうしてスペインに帰国できなかったセラとエドモンドは関西で敗戦を迎える。これに続くセラの戦後は次のようなものであった。

- 1945年（昭和20年）太平洋戦争が終結。アメリカ占領軍・第二十五歩兵部隊が大阪に駐屯する。
どのような縁によってかは判然としないが、セラはその付属学校の教師となって、米軍子弟に絵を教えるようになる。
- 1947年（昭和22年）アメリカ占領軍に関わることによって特権的な地位が与えられたようで、この年に北海道に旅行してアイヌの老人の頭部模型をこしらえている。
- 1948年（昭和23年）アメリカ経由（西海岸、アルゼンチン経由ともいう）でビルパオを経てバルセロナに帰国。この時に妻・エドモンドも同行してスペインに渡った。
- 1954年（昭和29年）簡一とガブリエルがセラと娘の暮らすバルセロナへ移住。
- 1972年（昭和47年）簡一がバルセロナで死去。
- 1990年代 エドモンドが死去。
- 2002年（平成14年）セラが死去。

⑥……………おわりに

このように、セラは日中戦争・スペイン内乱・太平洋戦争と続く激動の十五年間を日本で暮らした。したがって彼にとっての「日本」とは相当に複雑なものであったと推測される。日本での生活は関西の有産階層に属しており、なかでも厳しい見識を持つ貞剛の影響下にあった伊庭家の人々のなかにあり、その周辺には多くの日本人芸術家がいたものと考えられる。この間に生じる財閥をめぐる社会状況の大きな変化にセラとエドモンドがどのように対応したのかなど、まったくわからないことが多い。

そして、戦後再び来日して資料収集を行った時に、そうした戦前の人間関係が表立って表れることはなかったようである。また、収集した資料にも、貞剛やその周辺の人々なら示したであろう、日本の美術や文化に対する関心はまったく示されていない。強いて言えば、来日時の拠点が関西（神戸・大阪）であったことになんらかの繋がりを感じる程度のことである。著者がバルセロナで会った時に、セラは、日本にもよい画家は少しはいたけれど、大方はだめで、彫刻家はもっとだめだった、という意味のことを述べていた。つねにヨーロッパに向けたバルセロナの芸術家の視点からみると日本の当時の美術界の状況はそういうものだったのかもしれない。セラは浜田庄治を高く評価していたが、その他の作家についてはまったく記憶がなかった。そして民芸を日本の芸術と考えていたわけでもなさそうである。

こうして、日本と運命的な関係を持った彫刻家・エウドラド・セラ・グエルを追跡して、彼にとって日本の民芸品がどのような意味をもっていたのかを知りたいと考えたのであるが、結局はなにも明らかにならなかった。そして、今もって不思議なコレクションがバルセロナ民族学博物館に残っているのである。

実は、日本の焼物の評価に関連して、もうひとつパピツ・レオレン・アルティガス (Papitu Lloren Artigas) の存在が考えられる。アルティガスはジョアン・ミロとともに陶芸作品を作ったことで知られるが、一時期パリに滞在しており、1950年代以後流行した北欧工芸運動の影響を強く受けていたという。この流行は日本の民芸・民窯にも影響を与えており、彼もしきりに来日して民窯を訪問している。実はこのことは、バルセロナにおいてはフランス経由で日本が理解されてきたことを暗示していると思われる。そういう繋がりもセラ・コレクションの内容に関わっているかもしれないのである。

このコレクションについて、もう少し意味あることを引き出そうとするならば、当時のスペイン(というよりもバルセロナ)の状況をもっと正確に把握して、そこで日本がどのようにイメージされていたかを知ることが必要であろう。同時に1960年前後の日本の観光文化としての民芸が日本人によってどのように意識されていたか思い出す必要があるであろう。その意味でこの調査はまだ始まったばかりである。

最期にこのコレクションの縁によって、バルセロナ民族学博物館から学芸員ムリエル・ゴメス・パラドス (Muriel Gómez Prados) が日本に派遣されて、その成果が同博物館の日本の食文化に関する企画展示「I T A D A K I M A S U」の開催となったことを付記する。

参考文献

- 「Erudald Serra」 Fundción Folch
「Art of Equatorial Guinea The Fang Tribes」 Fundción Folch
「Etnografía de Filipinas」 Fundción Folch
「Arte Txtil en Indonesia」 Fundción Folch
「フォルチュ 財団の開かれた世界」(「Miradas el Mund Abierto del la Fundación Folch Fundación Folch」)
「エウダルド・セラ」(「Erudald Serra」 Fundción Folch)
「エウダルド・セラの生活遍歴」(Restros de vida EUDALD SELLA)
「明治の洋画・鹿子木孟郎と太平洋画会」(児島薫・「日本の美術」352)(至文堂)
「幽翁」(昭和8年・1933年・文政社)復刻(昭和56年・1981年)
「住友財閥史」(作道洋太郎編著 教育社)

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)

(2003年1月30日受理, 2003年5月9日審査終了)

Etonològic de Museu Barcelona and Sella Collection

ASAOKA, Kouji

This study is an analysis of public museums in Barcelona, Spain, in view of the social context and the representation, especially focusing on Etonològic de Museu Barcelona and the collection related with Japan.

The collection of Japanese materials is tentatively named Sella Collection from the collector's name, Eudald Sella Güell.

The collection dose not consisted of old treasures, but so called *mingeihin* (folkloric arts for tourists) in around 1960, therefore if it is evaluated from the strict point of aesthetic view, it could be regarded as cheep miscellaneous collection, but on the other hand, if changed the point of view, the Japanese tourism culture at that time and the popular westerner's view for Japan could be seen in the collection. The latter view can be thought to connect with today's popular Japan oriented booms.

Moreover, studying the intention and the process to collect the materials showed the relations between the bourgeois people and the artists in Barcelona after the World War 2nd, and very complicated human relations between European and Japanese in from Meiji through Taisho to Showa era.

Sella's profile on this paper shows to one more additional fact that a granddaughter of Teigo Iba who was the famous general manager of Sumitomo Zaibatu, married Sella, and her parents (one of Iba' s son and a French woman) lived with them for a long time in Barcelona and died there. So the collection presents us one of aspects of a Japanese bourgeois family related with European for about 100 years.

As the result of the research, it can be said that Ethnològic de Museu Barcelona has many collections, but mainly not systematically collected. And Sella Collection is collected by the bourgeois taste in Barcelona mixed with the viewpoint of related Japanese at the time. So, the Collection dose not present Japanese authentic material culture, but it is very valuable for focusing on the aesthetic tastes of both Barcelona and Japan after the World War 2nd.
